

天然記念物(8) 岩屋観音窟

服部 富雄

すこし古い話である。いまから5年前 会社からの依頼調査で 山口県の玖珂鉱山へ出張したことがある。

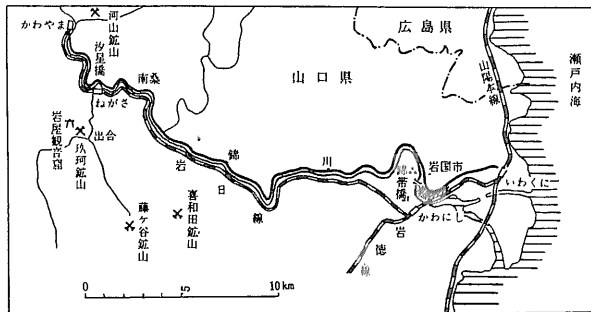
錦帯橋で有名な山陽本線岩国駅で乗り換え 国鉄バスで錦川に沿いさかのぼること 27kmで 根笠川との合流点 渡里橋に着く。その後 このコースに沿って新設された岩日線は 国鉄の代表的な赤字路線の1つとして 新聞紙上を賑わしたので 記憶しておられる方もあるだろう。

渡里橋から根笠川に沿う県道を南に約4kmで出合部落に着く。ここに玖珂鉱山の事務所や選鉱場がある。

玖珂鉱山から南東方 喜和田鉱山・藤ヶ谷鉱山にかけての一带は かなりよく知られた銅・タングステン鉱床地帯で いずれも1880年代の後半から1900年ごろ すなわち日清(1894~95)・日露(1904~05)戦争の頃に 銅鉱床として開発され 1911年にタングステン鉱が発見されてから 1914~19年の第1次世界大戦中はタングステン鉱山として盛況を呈した。大戦後の不況でほとんどの鉱山は休山となり のち廃山となったヤマも多い。

その後 玖珂鉱山は太平洋戦争のはじまった1941年に再開され 1945年敗戦とともに休山 1952年朝鮮戦争休戦後に三開されて今日にいたっている。

この付近の地質は いわゆる秩父古生層の粘板岩・砂岩・チャート・石灰岩およびこれを貫く珪岩脈からな



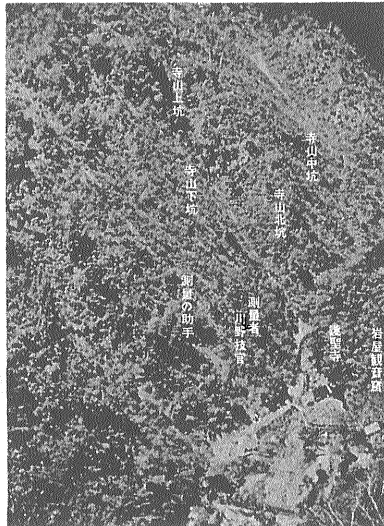
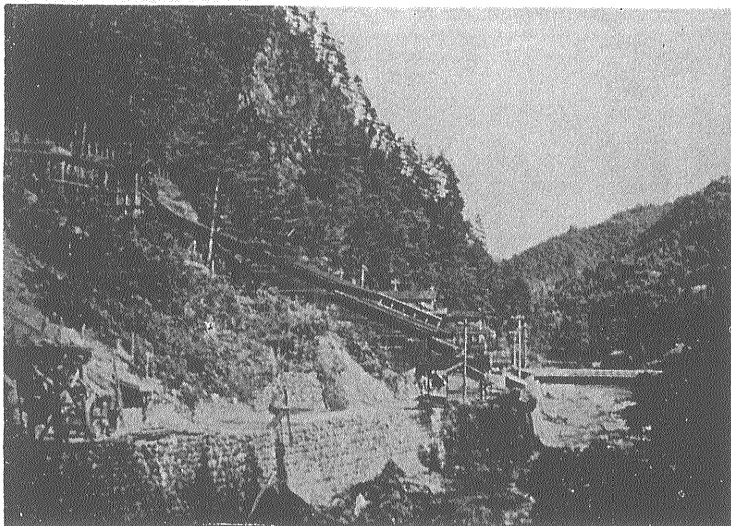
第1図 位置図
岩屋観音窟は山口県玖珂郡美川村大字根笠字岩屋にある

り これらの古生層は ほぼN70~80°W に走り 西に30°内外の落ちをもつ軸に沿って褶曲する。また石灰岩およびこれを交代生成した鉱床は 褶曲軸に沿って配列し しかも石灰岩はこれらの褶曲軸の方向に細長く伸ばされた形状をもっている。

1957年9月に調査した玖珂鉱山岩屋地区は 根笠川の支流である常燈畑川の谷から鹿田にいたる区域であって 常燈畑川を 合流点の栗ヶ瀬から 約400m 遡ったところ 区域のほぼ中央 護聖寺地籍内に大きな石灰岩の露出があり かなり立派な石灰洞があつて 洞内に観音像を安置してある。

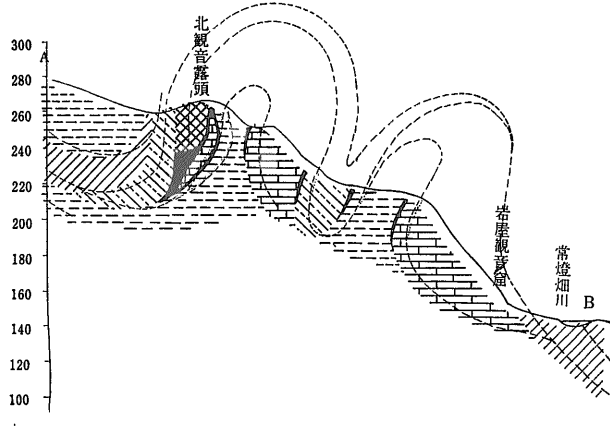
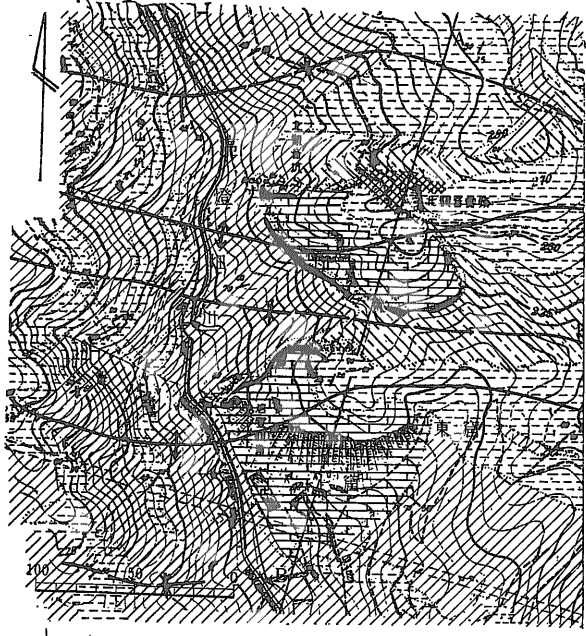
これが防長百景の一つ 岩屋観音である。里人のななしでは この観音さまは弘法大師が刻んだもので 長年月にわたり鐘乳石から滴った石灰のために 元の木像がすっかり石になってしまったと伝えられている。

寺は1951年7月のルース台風で大破したものを 調査当時 再建中であつた。洞内に入ってみると写真でもわかるように 上から垂れた鐘乳石の真下に観音像の頭はなく すこしズレていて 像は台座になっている大



美川村大字根笠字出合の玖珂鉱山選鉱場 根笠川は屈曲しながら南(手前)から北(前方)へ流れる 橋の東のたもと(右)に事務所があり 事務所の前に社宅や合宿がある (服部撮影 以下同じ)

岩屋観音の谷



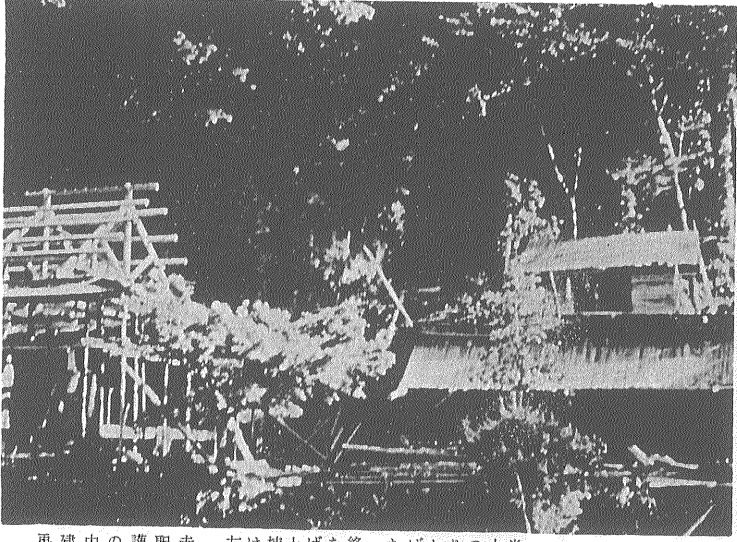
← 第2図 岩屋観音付近の地形地質図
 山口県玖珂郡鉢山岩屋地区地形地質図の一部
 昭和32年9月調査 地質調査：服部富雄・佐々木昭，地形測量：川野辰男。（原図は縮尺2,000分の1図の発表を許可された田中鉱業(株)に感謝する）

- | | | | |
|--|------|--|-------------|
| | ヤブ | | 粘板岩 |
| | スガルン | | チャート |
| | 背斜軸 | | 粘板岩とチャートの互層 |
| | 向斜軸 | | 石灰岩 |
| | | | 珪岩 |

石筍の上にセメントで固着してあった。弘法大師にまつわる云い伝えは全国到るところにありさほど珍しくもない伝説の一つといえるであろう。本堂の横には仁王尊が永年の雨かぜでもとの彩色はすっかり剝げ落ちてはいたがギヤマンの眼をカッと見開いて護聖寺の歴史の古さをしのばせてくれた。

地質図でわかるとおり石灰岩の岩体は南北に並んで2つありその周縁部に沿ってスカルン鉱体およびその

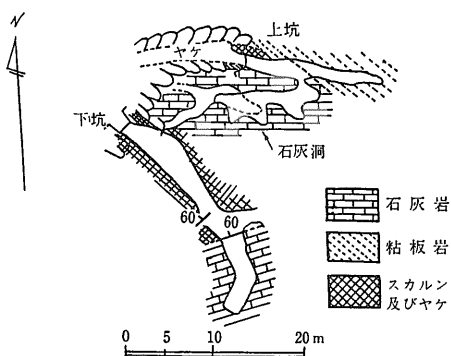
ヤケを形成している。北観音石灰岩に伴って北観音露頭と北観音坑(旧坑)があり岩屋観音石灰岩に伴う鉱体は常燈畑川の川底から約35m下った疎水坑地並で確認されている。北観音坑では上の坑道と下の坑道とが母岩の割れ目に沿う石灰洞で連絡していたがここでは鐘乳石や石筍は形成されていなかった。岩屋観音石灰岩について調べたところ観音窟の西に接して一つ(仮に西窟と呼ぶ)観音窟の直ぐ上方にひとつ(上窟)石灰岩体の東の端にひとつ(東窟)観音窟とともに合計4つの石灰洞があることが判った。西窟は間口は広いが奥行はなく鐘乳石や石筍がほとんどなくて大小の石仏(材質は砂岩)が沢山並んでいた。上窟は奥行20m 足らずであるが鐘乳石が美しい。東窟は全長50m以上ありやや複雑なかたちをしている。調査のさいに実測した見取図を第4図に示した。



再建中の護聖寺 左は樹上げを終わったばかりの本堂 後方は岩屋観音窟 石段を昇って観音窟に入る本堂の後に西窟がある



護聖寺内本堂の横にある仁王尊 色は剝げ落ち指は欠けているが 筋骨たくましくギヤマンの眼をカッと見開いている



第3図 北観音坑(旧坑) 凡例は第2図に同じ(服部原図)

これらの石灰洞の中は湿潤ではあるが 大して深くもなく 地下水脈というほどの地下水もない。洞内で見えた動物は蝙蝠とゲジゲジ(ヤスデ)だけである。

最近ふとした機会に この岩屋観音が天然記念物に指定されていることを知ったので 早速 文部省へ調べに行った。文部省の史蹟名勝天然記念物指定台帳によると 次のとおりである。

第一類 天然記念物

昭和九年一月二十二日 告示第十六号

名称 岩屋観音窟 (第二類)
 所在地 山口県玖珂郡
 説明 古生層ノ石灰岩ヨリ成レル根笠台地ニアル石灰洞窟ナリ 洞窟ハ奥行約十三メートル 幅約六メートル 高約十一メートル 規模大ナラズト雖 鐘乳石及石筍ハ頗ル能ク発達シ 殊ニ洞内ノ略中央ニ石灰華ヨリ成レル高約〇・八五メートルノ座像アリ 是レ石灰華ガ木



岩屋石灰洞の上窟と東窟との見取図
 印は写真に示す鐘乳石(服部原図)

ノ観音像ヲ被ツテ発達シ 後 木質腐朽シテ 観音像ノ仮像ヲナスニ至リタルモノニシテ 學術上珍トスルニ足ル

指定ノ事由 保存要目中 天然記念物中 地質鉱物ノ部 第七 十二ニ依ル
 保存ノ要件 公益上必要已ムヲ得ザル場合ノ外 岩石ノ採取並破壊其他現状ノ変更ハ之ヲ許可セサルコトヲ要ス

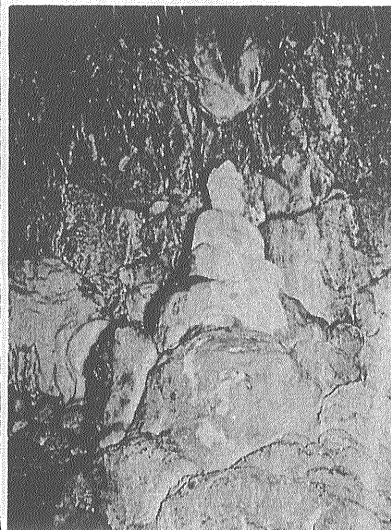
地籍 桑根村大字根笠字岩屋 護聖寺
 山林一〇〇〇坪 宅地十三坪
 (第二類というのは地方的な物質を意味し 桑根村は町村合併前の村名で現在は美川村に属する)

指定の事由の第7および第12というのは 地質ニュース No. 67 (1960・3) の天然記念物(1)にも掲げられているように

- (7) 岩石の組織
- (12) 特に貴重な岩石 鉱物及び化石の標本



寺山から鹿田をのぞむ



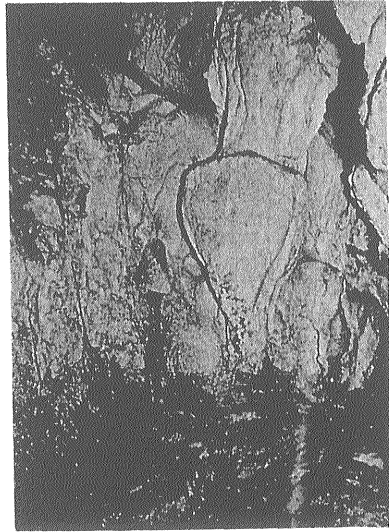
岩屋観音窟の内部と岩屋観音

であって この岩屋観音窟が(6)洞 穴 によって指定されたものでないことがわかった。

そうと知っていれば 5年前に 観音像をもっとよく観察してくればよかったと悔んでも後の祭りである。善男善女の信仰に水をさす気は毛頭ないが こんごもし機会があれば さらに詳しく調べてみたいと考えている

ともあれ過去数十年にわたって戦争とともに盛衰した鉱山の真真中に 平和を象徴する 世にも珍しい観音像が安置されているのは 奇特のいたりというべきであろう。 リバイバルブームの世の中にあって ただ平和のために 観音さまの御利益のあらたかならんことをわれひとともに祈りたい。

(筆者は 鉱床部)



岩屋上窟の鐘乳石
石灰洞の高さは約1mこの鐘乳石の右のところをはって入り洞はさらに奥に続く

学会 ニュース

伊豆半島白岩化石採集旅行

と き 昭和37年11月18日(日)
目 的 レピドシクリナなどの大型有孔虫の採集
行 程 東京発 8時6分(準急東海2号)
三島着 9時54分 修善寺10時30分
東京帰着20時38分の予定
費 用 交通費のみ(電車賃920円準急100円)
指 導 国立東京科学博物館古生物学課
氏家 宏氏
携帯品 ハンマー ルーペ 管びん 地形図(15万 修善寺)
申 込 申込順30名で〆切 博物館普及課へ問合せの上お申し込み下さい。
電話 (821) — 3771 (代)
雨天中止

学術講演会

と き 昭和37年11月15日(木) 2:00—4:00PM
会 場 国立科学博物館本館1号館講堂
演 題 地質年代の測定
講 師 学習院大学教授 木越 邦彦氏

第6回 粘土科学討論会

と き 昭和37年11月7日・8日 10時—4時
会 場 日立ファミリーセンター
仙台市東四番丁51 日産生命ビル1階 電話 仙台(5) 1683
内 容 特別講演
(1) ベントナイトと有機高分子

川口桂三郎 (京都大学農学部) 教授

(2) 東北地方の地下鉱物資源—分布とその利用— 鈴木廉三九 (東北大学理学部教授)

一般講演
粘土中のカオリン鉱物と緑泥石との鑑定法

生沼郁氏 (東洋大学) ほか
その他26題
シンポジウム

(1) 粘土鉱物の赤外線吸収
(2) 沸石—成因・産状およびその利用—
粘土研究会

地球化学討論会開催される
地球化学研究会の秋季討論会(日本化学会関東支部と共催)が次の日程で開催されました

研究発表
10月11日~10月13日 地質調査所会議室
エクスカージョン

10月14日~10月15日 箱根 伊豆半島
研究発表は課題討論と一般研究発表(講演数47)とに分かれ 3日間休憩時間もないほどの盛況で 連日100名以上の熱心な聴講者が集まり関係者を喜ばせました。
課題討論の題目および講演者は次の通りです

1) ジオクロノロジーの諸問題
年代測定と宇宙線 小田稔(東大核研)
C¹⁴法による絶対年代測定
木越邦彦(学習院大理)
U, Th—Pb法による絶対年代測定
斎藤信房(東大理)

K—Ar法による絶対年代測定

植田良夫(東北大理)
日本における結対年代測定例について
野沢 保(地 調)

2) 有機地球化学研究の技術問題
有機地球化学の技術—分離および抽出
小山忠四郎(名大理水質研)
石油と底沈中のポルフィリンの分析技術
G.W. Hodgson(カナダアルバーター石油研)
有機地球化学の技術—機器分析
半谷高久(都立大理)

3) 隕石の化学
隕石の化学 浜口博(教育大理)
隕石および地殻物質におけるランタン系元素のパターンの相異の解釈とその意義
○松井義人 増田彰正(東大理)
各種隕石の成因についての考察
○西村雅吉(北大大理)
E.B. Sandell(ミネソタ大)
隕石中の宇宙線生成物
本田雅健(カリフォルニア大 現東大物性研)

エクスカージョンは約50名が参加して行なわれ 箱根火山および伊豆半島などの地質学的な解説と温泉についての説明[高橋倉沢両技官 室住正世教授(室蘭工大)]が行なわれました

討論会の詳細は紙面の関係で省略致しますが 講演要旨は事務局(地球化学課)にありますのでご利用下さい

最後に今回の討論会が皆様のご協力により無事終了致しましたことをお礼申し上げますとともに 担当者の手落ちで地質ニュース(9月号)に学会開催の掲載が洩れましたことを深くお詫び致します
(技術部地球化学課)